

英日同時通訳における think の訳出について

西 村 友 美

1. はじめに

通訳という行為は、きわめて短時間で訳出を行わなければならない。とくに同時通訳では、「最大限に瞬時であることが期待される」（船山ほか 2002：1）。そのような通訳の条件に応えるべく、通訳養成機関では理解・訳出の両段階で活用できるストラテジーを編み出し、通訳志願者に伝授している。また、その内容は一般書でも知られるようになり、言語教育にも応用されるようになってきている。シャドーイングやスラッシュ・リーディングなどはその一例であろう。

教育現場における英語シャドーイングの効果については、すでにいくつかの実証研究で指摘され（たとえば玉井 2005、倉本 2004）、いくつもの効果が列挙されている。とくに英語を聞いたときに日本語に翻訳せずに限られたスパンで聴解する力を養成できるとする側面が注目を集めているようである。スラッシュ・リーディングも同様に、文章を返り点読みして日本語に翻訳することなく、意味のかたまりごとに文頭から理解をしていく方法を身につけられるという要素が認められている。

いっぽう訳出の面では、「順送りの訳」が通訳養成機関で重要な訓練法とされ、実行されている。これは、サイト・トランスレーションという通訳現場の訳出方法から導かれたものであるが、基本的にはスラッシュ・リーディングの理解プロセスを最大限訳出に反映させる方法である。言い換えれば、英日の文章構造の違いを超越して、情報や意味の切れ目ごとに訳出していく方法である。たとえば不定詞句・前置詞句の前までを訳出してから後続部分を訳す、主語と動詞を訳してから目的語を訳すなどの工夫をする、というものである。

しかし、このようにスラッシュ・リーディングの理解プロセスをそのまま訳出表現に反映させることが、実際の同時通訳でどの程度実行されているかを検証した研究は数少ない。むしろ、船山ほか(2002)では、目的語となる名詞句の訳出より動詞の訳出が遅延する傾向が観察された。

そこで本稿では、動詞 think に焦点を当て、実際の同時通訳でこの動詞がどのように訳出されているのかを検証し、なぜそのようになるのかを考察する。

2. 順送りの訳に

2.1 同時通訳の実際

「同時通訳における訳出は最大限に瞬時であることが期待され、また、それが通訳者の努力目標になる」(船山ほか 2002: 1)ことから、養成機関では、「順送りの訳」という手法が勧められている。実際の通訳例をみてみよう。

(1)

E004 BUT WE HAVE A SENSE IT'S GOING TO BE

J004

E005 DIFFERENT. THAT THE US ACTION IN IRAQ, THAT THE WAY THE REGIME COLLAPSED WITH

J005 でも、変わっていくだろうというそういう感触はあると言います。イラクに

E006 VIRTUALLY NO RESISTANCE IS GOING TO HAVE A DRAMATIC EFFECT ON THE WAY

J006 対するアメリカの行動、そしてまた 政権が崩壊したのはほとんど抵抗をなくして起こりました。

E007 PEOPLE SEE THEMSELVES, THE WAY PEOPLE SEE THEIR STATES, AND THE WAY PEOPLE SEE

J007 これが 非常にドラマチックな、 劇的な、 影響を与えると思います。 自分たちの自己

E008 THEIR REGION. IT'S SIMPLY TOO EARLY TO TELL WHAT THAT WILL LOOK LIKE, BUT

J008 理解や、 それからその地域や 国に関する 考え方がです。 どういう

E009 EVERYBODY I KNOW IN THE REGION THINKS THAT THE CHANGE IS COMING

J009 ようなものになるかというの はまだわかりませんが、 あの地域のひとはみんな、

E010

J010 変化がやってくると考えています。

「順送りの訳」に注目し、原発言の英語と訳出の日本語がどのように対応しているかを観察する。番号は英語と日本語が対応するように付記した。まず E005行目の主部①THAT THE WAY THE REGIME COLLAPSED のあとに後置で修飾部②WITH VIRTUALLY NO RESISTANCE が生起するところを、訳出では、J006行目①「政権が崩壊したのは」という主部と②「ほとんど抵抗なくして起こりました」という述部の形態で訳出し、原発言の後続述部③IS GOING TO HAVE A DRAMATIC EFFECT を「これが」という代名詞で受けて、③「非常にドラマチックな、劇的な、影響を与えます」という述部で一旦まとめあげている。このように「順送りの訳」にするためには、原発言の文構造を超越して日本語の文構造を構築する現象がみられる。原発言はさらに「影響を与える」対象として、修飾部④ON THE WAY PEOPLE SEE THEMSELVES, ⑤THE WAY PEOPLE SEE THEIR STATES, ⑥AND THE WAY PEOPLE SEE THEIR REGION と続くが、これを④「自分達の自己理解や」⑥「それからその地域や」⑤「国に関する」と訳出し、「考え方がです」とまとめている。すべてが「順送りの訳」になっているわけではなく、⑤－⑥が⑥－⑤となるように順序の入れ替えが起きたりもするのであるが、いくつかの部分で「順送りの訳」が用いられていることが観察される。

このような手法は、瞬時の訳出を期待される同時通訳という作業に適っているばかりではなく、通訳者自身の記憶負担を軽減できるという好都合を生み出すことになる。そこで、通訳、特に同時通訳は「順送りの訳」が基本であるとされ、その指導が多くの養成機関でおこなわれているのである。では、指導書からどのような「順送りの訳」が教授されているのかを次の節で検証する。

2.2 指導書の実際

順送りの訳を提唱する指導書は数多い。篠田・新崎(1995)は、「日本語の語順にのせてしか英語を処理することに慣れていない」(p.58)学習者に、「文章は文頭から理解していく、頭から意味付けをおこなっていく」(p.59)訓練を推奨している。

(2)

- a. ①There were even nurses／②who wouldn't go／③near him.
- b. ①看護婦さえた／②来ようとしなない人が／③つまり彼の側には。

(篠田・新崎 1995: 63-65)

水野(1995)も順送りの効用を、訳出者の記憶への負担を減らせること、関係代名詞などのあとにあらわれる修飾語句が日本語表現としては許容できない長さになって名詞に先行するのを避けられ、ひいては聞き手に理解しやすい訳出文にできること、そして原発言とできるだけ情報提示順序を一致させるほうが自然な知覚の動きを反映させられる、という理由で通訳における「順送りの訳」の効果を認めている。例(3)は、不定詞の処理に「順送りの訳」を活用できる例である。

(3)

- a. ①The United Nations Security Council has agreed to tighten sanctions against Haiti／②to try to force its military leaders to restore democracy.
- b. ①国連安全保障理事会はハイチに対する経済制裁を強化することで合意しました。／②(ハイチの)軍事指導者たちに民主主義を回復させることが目的です。

(水野 1995: 113)

大学での通訳授業を想定した教科書にも「順送りの訳」の指導は随所に見られる。例(4)は一例である。その他の多くの教科書も日本語の語順にそった訳出が通訳の基本であると解説され、練習問題が準備されている。

(4)

- a. ①Business people, / ②academics / ③and even high school students use the Internet / ④to get information / ⑤as part of their daily lives. //
- b. ①ビジネスに携わっている人 / ②学者 / ③そして高校生ですらインターネットを使い、 / ④情報収集に役立っているのです。 / ⑤これは彼らの日常生活の一部になっているのです。// (水野・鍵村 2005 : 10)

従来民間機関での通訳養成が主流だった日本では、その理論づけよりも実践することが重んじられてきた。したがって、どういう基準で原発言を区切って順送りで訳していくかが明確でないまま現在に至っている。篠田・新崎(1995)は「意味、情報の切れ目」(p.61)というに留まり、その単位の大きさは、「各人異なります」(p.61)としている。水野(1995)は「順送りの訳」ができる構文や動詞の種類、および態の扱い方を具体的な13項目で例示しているが、あらゆる場に適用できる基準は示していない。しかし、総体的に多くの指導書では、おおよそ言語理解や英語教育で言われる chunking(たとえば、Brown 1994)に基づいた区切りが適用されているといいようである。この chunking による読解手法のひとつに通訳訓練のスラッシュ・リーディングがあることも納得ができる。

しかし、基準が明確でないままにこの「順送りの訳」をあらゆる通訳の場合に当てはめることはたして可能であろうか。水野(1995)は、「こうすれば必ず成功するという、いわゆるアルゴリズムではありません」(p.112)とし、不自然な日本語になるようなときは「順送りの訳」を避けるように勧め、その機械的な適用を諫めている。篠田・新崎(1995)も、この訳出方法が文法訳読法に基づいた聴解から脱するために有効であり、理解の質を重視する方法ではあるが、洗練さには欠けることを注記している。熟達した通訳者は「順送りの訳」の限界も認識しているのである。

ただし、篠田・新崎(1995)は例(2)をこなれた訳にするには語順を変えず「看護婦の中には／いやがって／彼の側には(来ない人もいた)」とすればよいとしており、「少し手を加えればいいだけ」(p.70)の処理でよい訳になるとい

う。しかし、原発言が生起したあと瞬時に訳出をしなければいけない同時通訳で、このようなこなれた文が即座に通訳の口から出てくることをはたしてどこまで期待できるであろうか。例(4)においても、訳出の日本語のモーラ数が英語の原発言に比べてかなり多いことが目を引く。実際の通訳を考えれば、原発言の話速によっては訳出しきれない事態が出てくることはじゅうぶん想像できる。

限界は認識しつつ、一方でこのような疑問が論じられないまま、民間養成機関および大学の通訳授業における通訳教育の現場では、学習者にいかに素早くこなれた文の「順送りの訳」をするかが指導されているのが現状である。また、多くの教科書でこなれた「順送りの訳」の見本が文字で提示されているが、それらがオンラインの実際の通訳で可能なものなのかどうかの検証はされていない。

では、実際の通訳ではどのように訳出されているのであろうか。残念ながらこの分野の実証研究は数少ないが、その中で船山ほか(2002)は、同時通訳の訳出の遅れに注目し、その特質を考察したものとして特筆される。この研究では同時通訳において初出の名詞句は比較的早い段階で訳出されるのに対し、動詞を含む述部は遅く訳出される傾向にあること、またその EVS(ear-voice-span)¹⁾ も名詞句に比べ長短の幅が広いことが観察されたのである。この研究は、実際の通訳で、どのような品詞や文構成要素でも「順送りの訳」が適用されているわけではないことを示す価値ある研究といえる。

そこで次の節では、実際の通訳データから動詞 think のふるまいに注目し、この動詞がどのように通訳されているのかを観察し、またなぜそのように訳出されるのかを考察する。

3. think の訳出

3.1 分析データ

資料として、船山(編)(2002)の資料編に収録されている同時通訳データ資料 N-2 を活用した。この資料は、NHK BS 1 で放送されたイラク戦争をめぐる識者3名のTV討論である。それぞれ米国政府、英国政府、およびアラブ諸国

の民主化に関する専門家がイラク戦争に関する持論を展開する。think の個数は全部で69であった。それらを訳出された形態別にまとめると以下の表のようになった。

表 think の訳出表現

	訳出表現	N	%
1	無	21	30.43
2	思います	25	36.23
3	思って(おります)	2	2.90
4	思います・かもしれません	1	1.45
5	考えた	1	1.45
6	考えています	2	2.90
7	わけです	2	2.90
8	そういうことではないんです	4	5.80
9	捉えています	1	1.45
10	です	5	7.25
11	でしょう	2	2.90
12	ですよ	1	1.45
13	感じですね	1	1.45
14	ということですね	1	1.45
	計	69	100.00

訳出が語彙表現を形態的に置き換える方法でおこなわれるとすると、think に対応する日本語は、辞書的には「と思う」が自然である。しかし、実際には、そう訳出されているのは約40%で、およそ30%が対応する日本語がないという興味深い現象が観察された。さらに、本研究の研究課題である「順送りの訳」は、皆無であった。たとえば、次の例は3箇所の think が3通りに訳出されている。

(5)

E011 SO FAR WE HAVE SEEN NOTHING I THINK ARAB COUNTRIES ARE HAVING GOVERNMENTS
J011 これまでのところ、何も 特に大きな変化はありません。アラブ諸国は、

E012 WHICH KNOW VERY WELL HOW TO WEATHER THE STORM. SO, IF THERE IS ANY CHANGE IN

J012 ああ、 どういうふうに

E013 ARAB COUNTRIES, I THINK IT'D BE COSMETIC CHANGE, AND WE ARE GOING TO SEE THE

J013 この地域を回復するのかということをよく知っておりますので、特に大きな変化はないというふうに

E014 SAME RULERS STAYING IN POWER. I THINK ARAB PUBLIC OPINION DOES NOT LIKE THIS

J014 思います。表面は変わるかもしれません。そしてまた、 地元ですね、この有力者が

E015 DEMOCRACY COMING THROUGH THE REGION ON THE WINGS OF B-52 BOMBERS. ARAB

J015 そのまま権力を持ち続けるというようなこともあると思います。そしてこの、B-52爆撃機に

E016 PUBLIC OPINION DOES NOT REALLY BELIEVE THAT THE US CAME TO IRAQ WITH ITS

J016 よって、 この、アラブの 民主化が 行われるとなるとは 考えられないわけです。

「順送りの訳」の原理で考えれば、E011行目① I THINK はすぐに①'「わたしは思うのですが」と訳出するところである。ところが、実際はそれに対応する訳語はない。さらにE013行目② I THINK も「と思う」やそれに準ずる訳はなく、直接対応する訳語をあげれば②'「かしれません」という文末表現がそれに相当する。また訳出面でもうひとつ興味深いことは、E012行目の条件節③ IF THERE IS ANY CHANGE IN ARAB COUNTRIES と主節④ IT'D BE COSMETIC CHANGE は合体して③'④'「特に大きな変化はないと思います、表面は変わるかもしれません」と文構造を変えつつ、原発言に意味的に対応した訳出になっていることである。ただし、情報が統合する現象については本研究の考察対象ではないので、ここでは現象を指摘するだけにとどめておく。さて、think に戻れば、E014行目の⑤ THINK は⑤'「わけです」と、これも文末に表現されている。

ではなぜこのように think に対応する訳語が文末に生じたのであろうか。このことを次の節で動詞表現の概念化と認知タグの観点から考えていく。

3.2 動詞の概念化

船山ほか(2002)は、通訳者が動詞をすぐに訳出せずに保持するのは、概念的枠組みを作るから可能になるのだと結論付けた。

(6)

E1 [L:] WELL, LET'S SAY ABOUT 20 YEARS AGO, ABOUT A

J1 そうですね、 約20年くらい前になりますけれども

E2 THIRD OF THE STATES PERMITTED HOMESCHOOLING, AND SINCE THAT TIME

J2 3分の1の州が このホームスクーリングを

E3 ONE BY ONE, EACH STATE HAS PASSED A LAW THAT ALLOWS FAMILIES TO

J3 公に認めました。 その後 ひとつずつそういった数が増えて

E4 CHOOSE HOMESCHOOLING AS A LEGAL WAY TO MEET COMPULSORY

J4 きまして そして 家庭が ホームスクーリングを 合法的な

E5 EDUCATION LAWS.

J5 方法でもって義務教育を提供する方法として認められました。

E6 IT'S LEGAL IN EVERY STATE.

J6 すべての州で今 合法化されています。

(船山ほか 2002:13)

例(6)では、ALLOWS という能動形が結果的に「認められる」という受動形に置換されている。これは、通訳者が ALLOWS を聞いた時点でその形態を認識し、かつその概念を理解しながらも、全体の構文をまとめるプロセスで、形態上の意味合いを捨象してしまうことによると考えられるとした。形態は保持されなくても、LAW、FAMILIES、HOMESCHOOLING、COMPULSORY、

EDUCATION LAWS などがどのような関係にあるのか、それぞれ ALLOWS、CHOOSE、MEET で確実に捉えられることによって、概念的内容が保持され、訳出が遅延しても、また形態が変容しても、ホームスクーリングと州の関係は保たれる。その結果、原発言の「法律」が「家庭」に「許す」という関係は、日本語の「州」が「ホームスクール」を「認める」に置き換えても、それぞれの関係はかわらないままで訳出されることになる。

例(6)では ALLOWS 以外の他の述部でも、表現上の対応が一致していないものが観察される。たとえば、E3 行目の EACH STATE PASSED A LAW は「増える」という日本語で表現されている。また、E6 行目の (IT'S) LEGAL という形容詞は「合法化されています」という動詞に置換されている。

訳出がかなり遅れて生起する場合にもこの形態不一致が観察される。

(7)

E42 AND OBSERVED CHILDREN IN SCHOOL, AND AGAIN WE DONT FIND ANY

J42 一部の地域では ホームスクーリングの子供たちとそうでない

E43 DIFFERENCES THAT ARE IMPORTANT BETWEEN THE CHILDREN WHO HAVE

J43 子供たちを比較したところもあります。 そして そういった

E44 BEEN HOME SCHOOLING AND THE CHILDREN IN REGULAR PUBLIC

J44 調査結果からわかることは その 学校へ 行っている子供

E45 OR PRIVATE SCHOOLS.

J45 たちとホームスクーリングの子供たち 大差はないと 同じであるということです。

(船山ほか 2002: 16)

例(7)では、E42-3行目の DON'T FIND ANY DIFFERENCES が J45行目で「大差はない」という集約化された表現で訳出され、8.6秒後に生起している。このように時間的距離が長く、かつ集約化が起きていることは、すなわち情報

の概念化がおきていることを示すものと思われる。

これらのことから、船山ほか(2002)では通訳過程において動詞表現は表現レベルだけで捉えられているのではなく、概念化されて記憶され、この作業と同時に進行する原発言を聞くプロセスで他の情報の入力にしたがって絞込みをおこない、最終的な訳出が確定されると考えた。

3.3 概念的複合体と認知タグ

前節では、通訳過程で語彙項目が概念化されることを論じたが、Funayama (2002, 2004)、船山(2005)では、さらに認知タグという標識を導入して、このことを説明しようとしている。発話理解の過程で聞き手の中に構築される概念は言語表現に固定的に属するものでなく、その言語の要素に対応しながらも発話の展開の応じて変容する性質のものとし、それを「概念的複合体」と名づけている。たとえば、「輸出」という言語表現が「日本の貿易」という文脈で使われるとき、まず聞き手は「日本から外国へ」という意味をそこから汲みとるとする。話が進むにつれ、円高が話題になってくると、日本の輸出業者が痛手を受けることから「打撃」という概念が注目されることになる。このときの発話理解において、「輸出」に端を発して聞き手にある概念的複合体が生まれると考える。まず「輸出」に認知タグ1が付与されるとすると、次に認知タグ2をつけた「日本から外国へ」が生まれる。さらに、聞き手が「打撃」を、先行する2つの認知タグと同じ概念をめぐるものとして関連づけられれば、これが認知タグ3として、3つのタグがひとつの概念的複合体に付与される。ここでもし、聞き手に円高によって輸出業者が痛手を受けるという背景知識がない場合、「打撃」は別の概念複合体に別の認知タグとして付与されることになる。これが、認知タグと概念的複合体の基本的な考え方である。

この考え方に基づくと、入力された言語表現は概念的複合体を想起させる一方、いったん形成された概念的複合体は次の入力を待ち受ける基地の役割を担い、後続の情報を予見するための砦となる。

3.4 モダリティーとしての think

そこで、この概念的複合体と認知タグの観点から例(5)をもう一度検証する

ことにする。通訳者はまず、THINK という言語表現でこれに認知タグを付与するが、これと関係付ける何かがまだ同定されないので、「何かを思うのだな」とだけ漠然と考え、次に ARAB COUNTRIES という言語表現に認知タグ 1 を付し、さらに GOVERNMENT に認知タグ 2 を付けるとする。これらから「アラブ諸国の政府」という概念的複合体がいったん形成される。そこには番組の討論のテーマであるイラク戦争後、それぞれの国家の課題を抱える政府のイメージが想起されていることが想像される。であればこそ、WEATHER、STORM も「嵐」という辞書項目だけでなく、戦争と関連づけた概念として認知することが可能になり、KNOW というタグとあわせて 3 つのタグからおおよそ「困難を乗り越える方法を知っている」という概念的複合体を構築することになる。それが具体的に「どういうふうにこの地域を回復するのかということをよく知っておりますので」という訳出になるが、おそらくこの時点になって通訳者は THINK の認知タグがこの概念にかんする話者の個人的な考えを提示するために用いられたのだと同定するに至るのではないか。あるいはその個人的見解を丁寧に提示しようという意図を話し手から汲みとったかもしれない。結果として、I THINK に対応する日本語は形式的には訳出されなかった。通訳者がここで、I THINK を日本語として語彙的に対応する「私は思う」という言語表現に置き換えなくても個人的見解ということは聞き手に伝わると判断したか、あるいは時間的な制限から対応する日本語を訳出できなかったか、観察からは窺い知ることは困難であるが、聞き手にはこの訳出の日本語で話し手の意図は十分伝わる。

次の文は IF 認知タグで始まるが、これは IF のもつ言語機能から、ある仮定を述べるのだということがわかる。聞き手である通訳者はその仮定の枠組みを立てた後、CHANGE にもうひとつの認知タグを付与するが、既出の ARAB COUNTRIES はこの議論の中心テーマであるので概念的複合体としてまだ保持されていると思われる。したがって、どこに起きる変化かが予測されるのであるが、原発言でも続いて ARAB COUNTRIES が語彙項目として生起する。目立たないことではあるが、このような旧情報の発話は新たに記憶しなくてもいいので、通訳者の負担を節約してくれるものである。いずれにしてもこれらから総合して通訳者は「アラブ諸国の変化」という概念的複合体を構築すること

になる。ここで、IF 認知タグと概念的複合体を訳出してしまい、記憶負担を軽くする方法もあろうが、そうするかどうかは通訳者次第である。このケースでは、通訳者はこれを保持し、次を待つことになった。すると、I THINK が生起する。これにも認知タグが付けられるが、すぐに COSMETIC が続くので、ほぼ同時にアラブ諸国の変化が「皮相的なものに留まる」という概念的複合体が形成される。ただし、それは保持した IF から、まだ起きていない将来の事態にかんする予測であることが確認される。そのことを話者が、今後の中東における情勢を予測する内容として、IF で変化が起きる可能性を低くして提示した上で、I THINK でさらにこれが個人の予測であることを表明しているのだと同定する。通訳文を観察すると、IF 仮定節が形式的に対応する日本語に訳出されていないにもかかわらず、個人的予測であるという情報は、「特に大きな変化ないと思います。表面は変わるかもしれません」という重複する表現でとくに明確に提示されていることは注目に値する。

このように認知タグと概念的複合体を援用すると通訳プロセスがどのように進行しているのかがよくわかる。3つ目の THINK が含まれる文においても、通訳者が ARAB PUBLIC OPINION、THE REGION や LIKE を概念化していることが対応する日本語「アラブの民主化が行われるとは考えられない」という表現から推察できる。一方で、WINGS OF B-52 BOMBERS の語彙からは、B-52に代表される「米国の軍事力」という概念を形成したうえで、辞書的に対応する訳語を用いることを選択したのだらうと思われる。さて、DOES NOT LIKE の訳出については多少飛躍があるかもしれないが、「好ましいと思わない」、「嫌がっている」から、そのような状況は受け入れられないのだという情報を「考えられない」と表現したと考えれば、概念化が起きていることがよりわかりやすい。そして、文末の「わけです」に THINK の概念を反映させている。つまり、話し手は、米国が軍事力で中東に介入することをひじょうに嫌がっていることを強く訴えようとしていることを THINK で表現していると判断したのであろう。また、通訳では当然音声面の情報も入力情報として利用できる。この場合、話し手がどのようなトーンで THINK を発声したかを皮切りに、後続の文もどのような抑揚で話しているかという文全体を聞いた時点で日本語を確定できるのである。

このようにデータを観察してみると、think がきわめてモダリティー的な役割を果たしていることに気づく。モダリティーとは何かについて、日本語と英語の研究は必ずしも一致はしていないが、形式としては、助動詞、法助動詞をモダリティーとみなすことは共通している。さらに、英語研究ではモダリティーとは命題をめぐる主観的表現、真偽の可能性判断であるとされ(Palmer 1986, Lyons 1977)、日本語研究では主観的表現だけではなく聞き手にどのように提示するかという伝達態度も含むとされている(益岡1991、仁田1991)。この点においても英語と日本語のモダリティーの捉え方には相違がある。

英語の think は動詞であり、“I think of peace.” の文では本動詞として命題の一部を構成するが、モダリティーが命題内容の真偽と実現に関する心的態度表現とする定義(たとえば Palmer 1986, 1990)に照らせば think はモダリティーとして機能する場合もあると考えられる。Coates(1995)は、think をモダリティーとして用いられている次の例をあげている。

(8)

I think it's unlikely actually but he might do it again.

(Coates 1995 : 57)

例(5)の3つの think は、話し手が概念的複合体にたいしてもつ心的態度を表明したものと考えられるが、通訳者がその心的態度のさらなる差を認め、その差に応じた日本語訳をしていることが、訳出の形態がそれぞれ異なることから伺える。まとめておくと、①では、THINK を丁寧表現と捉え、②では、将来起こりうる事態に対する推量、③では、説明・説得という捉え方をしていると考えられるのである。

その訳が適訳かどうかはここでは論じない。通訳者がそのように判断するに至ったのは、原発言の入力情報のひとつひとつに認知タグを付与しながら概念的複合体を構築しつつ全体の情報を絞り込んでいく過程で、モダリティーである think が原発言で生起したとき、あるいはその直後にはその機能が同定できないという点に注目したい。この think 認知タグは可能な限り保持し、できればその働き、話し手の心的態度が確定するまで待つてから訳出するのがよりよ

い通訳になると通訳者が判断しているのではないかということに注目したい。
次の例では、think がきわめて長く保持されていることがわかる。

(9)

J022 イギリスだけでは ありませんけれども、 いまのイギリス政府が

E023 FROM ON HIGH. YOU CANNOT IMPORT IT THROUGH THE VEHICLE OF INVASION,

J023 理解していることは、民主党というのは 外から 持ち込むことは

E024 AND CERTAINLY NOT THROUGH THE VEHICLE OF OCCUPATION, AND

J024 できないと、 侵略によってこれを 持ち込むことはできないということを理解しています。

E025 THEREFORE, I THINK THE VIEW FROM HERE IS THAT THE AMERICANS WITH BRITISH

J025 また占領によって持ち込むこともできないということを理解していると思います。

[原文のまま]

EVS で、THINK と「思います」の間隔は20.7秒である。同時通訳において、長い間ある情報を保持することは通訳者の記憶負担を重くし、他の通訳作業にもしわ寄せがくるリスクが伴うものであるが、使用した資料では think にかんする限りすべてがこのような保持型であった。それは、think のモダリティーを聞き手である通訳者が受けとめる際、話し手の心的態度を think が生起した瞬間には同定できないことが考えられる。また、そのモダリティーを表現する行為の観点からみた場合、日本語のモダリティーはその含意によって文末表現として多くの表現形態があり、通訳者がその中から適切なものを選択できる余地があることもオーセンティックな通訳データから観察された。

このようなことから、実際の通訳教育の場では「順送りの訳」を機械的に同時通訳指導に適用するのではなく、言語の語用論的側面を考慮しながら、より現実に即した訳の提示や指導がされてもいいのではないかと考える。

4. ま と め

「順送りの訳」が実際の通訳ではどのように実践されているかという課題を、ナマの同時通訳素材をもちいて観察したところ、資料の中では think という動詞について順送りで訳されている例は発見できなかった。すべてが訳出文の文末に、対応する日本語が生起するケースばかりであることが判明した。さらに認知タグを援用して観察を進めると、think がモダリティーであるがゆえに文末での訳出が適当であり、必然であると思われることがわかった。このことは、とりあげた資料に固有のものではなく、他の一般の同時通訳にも十分当てはまる可能性を示唆しているものと考ええる。「順送りの訳」が自然な同時通訳と必ずしも同じ過程をとるものではないことを指摘し、今の通訳指導に一石を投じたいと考える。

なお、資料からは think をめぐるさまざまな日本語への訳出例が検証された。本研究ではとりあげなかったが、これらを精査することによって、日英語モダリティー研究にも資する材料が提供できるかもしれない。これを今後の課題としたい。

注

- 1) 原発言に生起した単語の語頭を計時の原点とし、それに対応する訳語の語頭までの所要時間とする。

参考文献

- 倉本充子(2004)「テキスト提示を伴うシャドーイングの有用性—認知メカニズムの観点から」*KWANSAI REVIEW 21*
- 篠田顕子・新崎隆子(1995)『高校生からお年寄りまで ボランティア英語のすすめ』東京：はまの出版
- 玉井健(2005)『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』東京：風間書房
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティーと人称』東京：ひつじ書房
- 船山仲他(2000)「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」宮端一範(編)『同

- 時通訳における情報フローの認知言語学的検証：平成10-11年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』大阪府立大学総合科学部、3-26.
- 船山(2005)「発話理解のミクロモデル」『同時通訳データに基づく言語理解のミクロ分析：平成15-16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書』神戸市外国語大学外国語学部、1-16.
- 船山仲他・笠原多恵子・西村友美(2002)「同時通訳における対訳遅延のメカニズム」船山仲他(編)『同時通訳における対訳遅延の認知言語学的研究：平成12-13年度科学研究府補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書』大阪府立大学総合科学部、3-24.
- 益岡隆志(1991)『モダリティーの文法』東京：くろしお出版
- 水野的(1995)「英語通訳トレーニング基礎講座」『通訳事典'95』東京：株式会社アルク
- 水野真木子・鍵村和子(2005)『Let's Interpret 通訳実践トレーニング』大阪：大阪教育図書株式会社
- Brown, H.D.(1994). *Teaching by Principles: An interactive approach to language pedagogy*. New Jersey: Prentice Hall Regents
- Coates, J. (1995). "The expression of root and epistemic possibility in English." In J. Bybee and S. Fleischman (eds.) *Modality in grammar and discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. Pp.55-66.
- Funayama, C. (2002). "Cognitive Tags in Simultaneous Interpretation." *Interpretation Studies* 2, 15-27.
- Funayama, C. (2004). "Conceptualization Processes in Simultaneous Interpretation." *Interpretation Studies* 4, 1-14.
- Palmer, F. R. (1986). *Mood and modality (1st edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (1990). *Modality and the English modals (2nd edition)*. London/New York: Longman.

同時通訳データ

「徹底検証 イラク戦争(1)」2003/4/24 NHK-BS